

# 日本の「人魚」伝説

——「八百比丘尼伝説」を中心として——

九頭見 和 夫

## I. はじめに

北陸地方を中心に日本の広い地域で語り継がれてきた「人魚」に関わる伝説の一つに「八百比丘尼伝説」がある。この伝説は、地域により多少内容が異なるが、共通するのは、人魚の肉を食べた娘がその後比丘尼になって八百年生存したということである。なおこの伝説については、比丘尼が何歳になっても若くて肌が白かったことから「白比丘尼伝説」とも呼ばれている。ところでこの「八百比丘尼伝説」で最も注目したいことは、この伝説をはじめ日本に伝わる「人魚」関係の伝説が、日本の様々な文献にみられる「人魚」像といかなる関係があるのかである。このことの解明のためには、当然のことながら、「八百比丘尼伝説」についての正確な内容把握、すなわちこの伝説はいつ頃から、いかなる地域の人々の間で伝承されるようになったのか、例えば日本の文献の中で「人魚」と目される生き物が最初に登場する『日本書紀』（720年）よりも伝承の時期は早いのか等である。

藤沢衛彦の『日本伝説研究二』によれば、人魚出現の最古の記録として、「清寧天皇5年(480年)、八百比丘尼人魚を食う(伝説)」と記されている。<sup>1)</sup>『日本書紀』に記された「人魚」とおぼしき生き物についての記述は、推古天皇27年(619年)の事であるから、藤沢衛彦の作成した人魚出現の記録の方がはるかに古いことになる。そこで各地に伝わる伝説を調べると、福井県小浜市に伝わる伝説には、海岸に流れ着いた人魚を拾って食べたため年をとらなくなった漁夫の娘が後に尼となって洞窟に閉じこもり、「源平盛衰の状況を見聞していた」<sup>2)</sup>とあり、同様に岡山県勝田郡に伝わる

伝説には、「娘のころ後醍醐天皇が隠岐に流されたことを覚えている」<sup>3)</sup>と記されている。鎌倉幕府の開基が1190年(治承4年)、後醍醐天皇が隠岐島に流刑されたのが1332年(元弘2年)、いずれも鎌倉時代のことである。

以下本論においては、前述の事実をふまえ、「八百比丘尼伝説」等日本に伝わる「人魚」に関係する伝説が、いつ頃からいかなる地域の人々によって伝承され、その後出版された文学作品等後世の様々な文献に登場する「人魚」像に対しいかなる影響を与えたのかを分析する。

## II. 「八百比丘尼伝説」の伝播時期

本稿はまず「八百比丘尼伝説」がいつ頃から人々の間で語られるようになったかについて検証する。前述の藤沢衛彦作成の人魚出現の記録には、「清寧天皇5年(480年)、八百比丘尼人魚を食う」と書いてあるが、古い時代のことでもあり、当然のことながら、根拠となる具体的な出典が明示されていず、単に「伝説」とのみ記されていることから、この記録を「八百比丘尼伝説」の最初の伝播時期の根拠とすることには無理があるであろう。同様に福井県小浜市に伝わる伝説や岡山県勝田郡に伝わる伝説についても、伝説のためやむを得ないことではあるが、「八百比丘尼伝説」が鎌倉時代とあるいは関係があるのではと推測させる程度の意味しか持っていないが、それでも鎌倉時代には、清寧天皇の時代とは異なり様々な記録が残っている。例えば1254年(建長6年)に発刊された説話集『古今著聞集』には、人魚の肉を食べた伊勢国別保の浦人(浦べに住む漁師や海女など)の話が記されている。

伊勢国別保といふ所へ、前刑部少輔忠盛朝臣

くだりたりけるに、浦人日ごとに網をひきけるに、或日大なる魚の、かしらは人のやうにてありながら、齒はこまやかにて魚にたがわず、口さしいでて猿ににたりけり。身はよのつねの魚にてありけるを、三喉ひきいだしたりけるを、二人してにいたりけるが、尾猶つちにおほくひかれてけり。人のちかくよりければ、たかくをめぐこゑ人のごとし。又涙をながすも人にかはらず。おどろきあさみて、二喉をば忠盛朝臣のもとへもてゆき、一喉をば浦人とりてけり。忠盛朝臣おそれ思ひけるにや、すなはち浦人にかへしてければ、うらみなきりくひてけり。されどもあへてことなし。そのあちはひことによりけりとぞ。

人魚といふなるは、これていの物なるにや。<sup>4)</sup>

この説話が掲載されているのは、巻第二十、第三十編「魚虫禽獸」、第七百十二段で、「段」の題名は、「712 伊勢国別保の浦人人魚を獲て前刑部少輔忠盛に献上の事」である。この説話で注目したいことは、「人魚といふなるは、これていの物なるにや」により編者橋成季が忠盛朝臣の件が発生する前にすでに「人魚」について何らかの知識を有していたことと、「そのあちはひことによりけるとぞ」により、浦人が食べた人魚の肉が美味であったことである。特に後者の「人魚」の肉が美味であったことについては、「八百比丘尼伝説」の伝播時期を解く重要な鍵の一つになると思われる。

つぎに伝播時期解明の手がかりとなるのは、柳田国男（1875年-1962年）の「山島民譚集二」である。死後出版（1964年）された本書で柳田は、福井県若狭に生まれ八百歳まで長生きした「八百比丘尼」の生存時期について、室町時代に刊行された『臥雲日件録』、『唐橋綱光卿記』、『中原康富記』等を拠り所に以下の推論を導いている。

八百比丘尼は恰も右の大化と大同との中間に生まれた人でなければならぬ。何となれば比丘尼が山城の京に来て世人に囃されたのは正しく宝徳元年（文安六年、1449年）の夏である。此事實は当時の記録に三種まで見えて

居る。先ず第一に臥雲日件録の七月二十六日の条には、近時八百歳の老尼若州より入洛す、洛中争ひ観る、居る所の門戸を堅く閉ぢ人をして容易に看せしめず、故に貴者は百銭を出し賤者は十銭を出す、然らざれば即ち門に入るを得ざる也とある。次に唐橋綱光卿記の六月八日の条には、白比丘尼御所に参る云々、年八百歳の由申す、怪異の事也、今日国に帰る云々、定めて篇解の物か云々、不吉の事也、不審の沙汰々々ある者也、言ふ莫れ莫れとある。此を以て見れば八百歳は証人の無い事称であつて、殊に比丘尼の身を以て御所に参るに至つては頗る保守派の人々の同情を失ふ所以であつたとみえる。更に中原康富記の同年五月二十六日の記事には左の如く出て居る。曰く或は云ふ此二十日頃若狭国より白比丘尼とて二百余歳の比丘尼上洛せしむ。諸人奇異の思を為す、仍て守護召上ぐるか、二条東洞院北頼の大地蔵堂に於て鼠戸を結び人別に料足を取り一見せらる云々。古老云く往年聞く所の白比丘尼なり云々。白髪なるの間白比丘尼と号する歟云々。官務行向ひ之を見る云々。然るべからざるの由巷説あるの間今日若狭国に下向す云々。帰ると謂つて中々帰らなかつたのである。右の二百余歳は誠に異聞である。自筆本と云ふから誤字もあるまいが、如何に金利の高かつた徳政時代でも、まさか四十割の懸値は無からうから、伝説の方面に於ては先づ先づ世上の八百歳を信用して置くのである。<sup>5)</sup>

「大化」とは、645年から650年までの飛鳥時代のことであり、「大同」とは、806年から810年までの平安時代のことであるが、柳田は、越後柏崎にある大石仏や武蔵の水判田の本尊仏等に刻まれた「八百比丘尼」の文字をもとに、「八百比丘尼」が大化と大同の中間の時期に生まれたと推測し、さらに室町時代の僧侶瑞溪周鳳の日記『臥雲日件録』等の記述をもとに、この「八百比丘尼」がその後宝徳元年（1449年）に京に上洛したことを記している。この柳田の推測がかりに正しいと仮

定すれば、「大化」と「大同」年間の間に生まれ、八百年生存した「八百比丘尼」が、「源平盛衰の状況を見聞」（福井県の伝説）したり、「後醍醐天皇が隠岐に流されたことを覚えている」（岡山県の伝説）としても何ら不思議はないし、1254年に発刊された『古今著聞集』の中で編者橘成季が伊勢国の浦人が人魚の肉を食べておいしかったことや「人魚といふなるは、これていの物なるにや」と記していることについても、橘成季が「八百比丘尼」のことを多少でも知っていれば納得のいくことである。

つぎに「八百比丘尼伝説」の伝播時期を知る手がかりとなるのは、江戸時代初期に活躍した儒学者林羅山（1583年-1657年）が著した『本朝神祇考』である。

余が先考嘗て語つて曰く、伝へ聞く、若狭国に白比丘尼と号する者あり。其の父一旦山に入り異人に遇ふ。与に俱に一處に到る。殆ど一天地にして別世界なり。其の人一物を与へて曰く、是れ人魚なり。之を食ふときは年を延べ老ひずと。父携えて家に帰る。其の女子迎へ歎んで衣帯を取る。因て人魚を袖に得て、乃ち之を食ふ。女子寿四百余歳、所謂白比丘尼是れなり。余幼齡にしてこの事を聞いて忘れず。<sup>6)</sup>

これは、林羅山が「幼齡」の頃聞いた話として紹介した「白比丘尼」に関わるもので、登場する白比丘尼がまだ子供の頃のことである。父親が山中で出会ったこの世の人とも異なる人から人魚の肉をもらって家に帰り、衣服を着替える時に袖の中から出てきた人魚の肉を白比丘尼が食べ、四百年生存したという話である。この羅山が伝聞した話で特に注目したいのは、白比丘尼の寿命が800年ではなく、400年であることである。羅山が耳にしたのは、「幼齡」とあるからおそらく江戸時代になる前、おそらくは室町時代の末期と思われる。この羅山の話や、柳田国男が根拠とした三つの文献『臥雲日件録』、『唐橋綱光卿記』、『中原康富家記』等から判断して、「八百比丘尼伝説」は、鎌倉時代頃から、遅くとも室町時代後期頃には、人々

の間で広く知れ渡っていた伝説であると推測されるのである。民俗学者日野巖は、鎌倉時代について、「人魚伝説もこの頃から急に世に現れた」、また徳川時代については、「人魚・海坊主・雷獣の話もこの頃が全盛であった」と記している。<sup>7)</sup>

### III. 「八百比丘尼伝説」の伝播地域

試みに日本の伝説を収集し分析した『日本昔話通観』（同朋社出版）をみると、人魚の肉（または貝等）を食べ800年（地域により1,000年等）の寿命を得た比丘尼の話、「八百比丘尼伝説」、およびその類話が日本の広い地域で伝播していることがわかり驚かされるのである。このことからまず気になるのは、一体「八百比丘尼」は何人いたのかということである。地域の広さから判断して「八百比丘尼」と呼ばれた女性が複数、それも多数存在したと考えるのが自然なのであろうが、一人、または少数の「八百比丘尼」が諸国を遍歴した例もあり、そのことによって広い地域に「八百比丘尼伝説」が伝播したと解釈することもまた可能である。例えば、愛知県東春日井郡に伝わる伝説には比丘尼が諸国遍歴の旅を重ねたことが記されている。

親族故旧の顔も見えなくなったのに、自分の姿のみが昔のままに若々としているので、娘は大いに恥じた。遂に浮世を厭って髪を剃って比丘尼となり、諸国遍歴の旅を重ねて終に若狭の国に辿りついた。その時は齢八百を数えていたが、それでも尚死なぬので、生きながら洞窟の中に入って姿を没したという。<sup>8)</sup>

同様に岡山県に伝わる「千年比丘尼」も川中島の善光寺など諸国をまわっているし、柳田国男が紹介した『臥雲日件録』、『唐橋綱光卿記』、『中原康富家記』に登場する高齢の「白比丘尼」も、福井県若狭から上洛し、京の地藏堂で見物料を取って自身の姿を公開したことから人々の話題になったことが記されている。しかし「八百比丘尼伝説」が広い地域に伝播したと推測される鎌倉時代や室町時代の頃の交通事情や、いな何よりも日本各地に伝播している「八百比丘尼」の素性が地域によ

りかなり異なっていることから判断して、「八百比丘尼」は広い地域にかなり多く存在していたと考える方が自然であると思われる。『日本昔話通観』等の文献をみると、全般的には漁師の娘が多いが、例えば福島県塩川町に伝わる「八百比丘尼」の場合は、聖徳太子の信任があつかった秦河勝の孫秦勝道の娘「千代姫」であり、<sup>9)</sup> 岐阜県恵那市に伝わる「八百比丘尼」の場合は「長者の女の子」である。<sup>10)</sup>

それでは、福井県の若狭を中心に日本のかなり広い地域に伝播しているといわれる「八百比丘尼伝説」は、日本のどの地域まで広がっているのか。柳田国男の研究をもとに、さらに詳細な「八百比丘尼伝説」の調査を行った高橋晴美は、「28都県89区市町村121カ所にわたり、その伝承数は166ほどになった」と報告し、詳細な分布表と分布図を用いて具体的な伝播地域について解説する。

八百比丘尼伝説の分布は、分布表・分布図を見てもわかるように、東日本に多く、西日本には少ない。八百比丘尼伝説の約八割を東日本が占めているのである。その中でも石川・福井・埼玉・岐阜・愛知の各県における分布密度が高い。反対に東日本でも岩手県・長野県などは分布密度が低く、全体として東北・九州における分布は少なくなっている。分布の特徴は、西日本では伝承地が広い範囲に散在しているのに対し、東日本では幾つかの地域に集中している。また西日本では伝承地が海岸付近に分布しているものがほとんどであるのに対して、東日本では海岸付近はもとより、栃木県・群馬県・岐阜県などの内陸部にもかなりの分布が見られる。

内容別の分布を見てみると、出身地は総括的な分布と置き換えられるほど広範囲に渡っており、岩手県から佐賀県までの地域にかなり平均的に分布しているといえる。八百比丘尼伝説が伝承されている都県の4分の3に相当する県は、いずれも出身地と伝える所を最低一カ所を有しているのである。これは全体として伝承地の少ない西日本に占める出身地

の割合が多いことをも意味している。<sup>11)</sup>

以上の報告からわかることは、「八百比丘尼伝説」が、北海道と沖縄県を除くほぼ日本全国、北は岩手県から南は佐賀県に至る28都県の広大な地域に伝播していることである。ここでこの分布表にはない県の一つ、青森県西津軽郡に伝わる伝説を紹介する。

夫婦と子供が浜に打ち上げられた魚を拾って生活していた。ある日、子供が魚を拾ってきたので、三人で食おうと三つに切って焼くが、嬬は匂いにつられて三切れとも食ってしまう。すると嬬は17,8の娘のように若返ったので、夫に叱られると家出してしまう。それから何百年かたって、鯨ヶ沢の人が仙台の石巻港で一人の尼に会い、この尼が家出した嬬だったという話を聞いた。この魚は人魚で、これを食ったために長生きしたのだ。<sup>12)</sup>

この青森県西津軽郡に伝わる「八百比丘尼伝説」の類話を付け加えたことには理由がある。それは、藤沢衛彦作成の「人魚出現の記録」において非常に多くの人魚出現が確認されている北の海、例えば北海道、青森県、秋田県の海岸に人魚を食べて長寿となった「八百比丘尼」と推測されるような女性の存在が確認されていないことに疑問を感じるからである。人魚の出現が多ければ当然食べた人間、例えば西津軽郡出身の比丘尼のような女性が存在しても不思議ではないと思われるからである。同様の疑問は、南方熊楠も「人魚の話」の中で述べている。熊楠があげた理由は、人魚のモデルとされるジュゴンの生息地が沖縄を北限とする暖地であることで、イギリスなど海外生活の経験のある熊楠の自然科学者の視点も加味された指摘と思われる。

『和漢三才図会』等に、若狭小浜の空印寺に八百比丘尼の木像あり。この尼、むかし当寺に住み、八百歳なりしも、美貌十五、六歳ばかりなりし。これ人魚を食いに因る、と。嘘八百とはこれよりや始まりつらん。思うに儒艮は暖地の産にて、若狭などにある物ならねど、海狗など海獣、多少人に類する物を人

魚と呼び、その肉温補の功あれば、長生の妙薬ありなど言い伝えたやらん。<sup>13)</sup>

いずれにせよ、人魚出現の記録が多い北の海や、人魚のモデルとされるジュゴンの生息地である沖縄に、人魚を食べて長寿を得たとされる「八百比丘尼」のような女性の存在が伝承されていないのは、ただ不思議としか云いようがないのである。

#### IV. 「八百比丘尼」の寿命

「八百比丘尼伝説」は、人魚の肉を食べた娘がその後比丘尼となり、福井県空印寺等で八百年の生涯をおくったという日本全国に伝播している伝説であることは既に述べたが、この「八百年」という数字にはいかなる意味が存在するのか。例えば人魚を食べた比丘尼の寿命については、林羅山の『本朝神社考』には、「女子寿命四百余歳」と記されているし、また岡山県浅口郡に伝わる伝説には「千年比丘尼」が登場するなど様々だからである。なおこの「千年比丘尼伝説」は、生きるのに飽きて諸国を回った後川中島の善光寺に居を定めた一人の比丘尼の話である。

ある時のこと、この津熊の者が、せえも、何年も何年も時代が変わった時でがアすが、善光寺さんへお参りに行ったんでがアらあ。その時にひょっとしたことから、この大長生きをした尼さんといろいろ話をしとったところが、お互アが備中もんじゃいうことが判って、いろんな話をしたんでがアしょう。せえでこの者が、津熊へもどって村の衆へ、この村にゃあ昔、こうしたもんがおったちゅうことを話したそうでがアすがな。千年も生きとった者がおったという話を、今にわっし等ア聞いとりますがな。せえで、これを千年比丘尼と言うていますがな、へえ。<sup>14)</sup>

さらにこの「千年比丘尼」が「八百比丘尼」となった経緯をのべた伝説(福井県小浜市)も存在する。

娘は霊肉を食ったため不老不死となる。娘は千歳の寿命があったが、八百歳の時若狭の殿様の重病を悲しんで、残りの寿命を譲り、生涯を閉じた。娘は八百姫明神に祭られ、八百

比丘尼と称される。<sup>15)</sup>

他にも人魚の肉を食べた娘が三百歳まで生きたという富山県黒部市に伝わる伝説もある。

黒部谷の碁の好きな八人の男の所に老人が来て、仲間に入る。男たちが老人に招かれていくと、山奥の滝につく。滝をくぐり抜け朱塗りの御殿でごちそうを食べ、宴は三日間つづく。男たちはみやげに人魚の肉をもらうが、気味悪いので滝を抜けて帰るときに川に流して帰ると、三年の年月がたっている。男たちはふたたび滝を捜しにいくが見つからない。人魚の肉を持ち帰った一人の男の娘がそれを食べ、三百歳まで生きた。<sup>16)</sup>

以上の伝説でも明らかなように、八百歳、千歳、四百歳、三百歳と人魚を食べた比丘尼の寿命はいろいろであるが、これらの数字を用いることによって、人々は「比丘尼伝説」にいかなる意味を込めようとしたのであろうか。特に注目したいのは、圧倒的に多い「八百」という数字に人々が込めたと思われる意味である。一般的な解釈をすれば、「八百」も「千」も数が多いことを意味しているが、特に日本の場合それ以上の意味はないのか。また「三百」や「四百」の場合には、いかなる意味を持っているのか。

「八百」(「はっぴゃく」, 「やお」) は、『日本国語大辞典』によれば、「物事の数の多いことをいう語」で、特に「やお」は「名詞について接頭語的に用いられる」とある。<sup>17)</sup> 試みに、「八百」を用いた語を列挙すると、「八百八町」(はっぴゃくやちょう)、「八百屋」(はっぴゃくや)、「八百会」(やおあい)、「八百日」(やおか)、「八百長」(やおちょう)、「八百丹」(やおに)、「八百万神」(やおよろずがみ)等があり、いずれも数が多いことは共通しているが、必ずしもよい意味でのみ用いられているわけではないことがわかるのである。このことから人々が「八百」という数字を用いたのは、末広がりといわれる「八」という数字に寄せる日本人特有の親近感がまずあって、さらに人数が多いことから「八百」とし、結果として「八百比丘尼」という表現になったとも考えられるので

ある。「千年」については、「八百」と同様、「ながい年月。永遠の年」<sup>18)</sup>を意味するが、江戸時代に売り始めた「千年飴」、キリスト教で使われる「千年王国」、「千年至福説」など「八百」とは異なり、ほとんどおめでたいことに使用されている。「千年」と「八百年」の両方を用いた「千年の田地、八百の主」という表現もあり、数が多いことを意味するだけならば、「千年比丘尼」でも「八百比丘尼」でもどちらでもよかったのではなからうか。「八百」を用いたのは、日本人、特に庶民の数に対する感覚の問題ではないかと推測されるのである。つぎに「三百」と「四百」についてであるが、いずれも数が多いこと以外特別な意味はないと思われる。例えば「三百」の場合、「三百代言」、「三百顔」など「三百」を用いた語が「低級」を意味する場合が少なくないことから、富山県黒部市に伝わる三百歳の比丘尼の例はまれな例であろう。

## V. 「八百比丘尼伝説」の影響

浦べに住む漁師が「人魚」の肉を食べたことについては、鎌倉時代に発刊された『古今著聞集』に記されていることを既に紹介したが、女の子が「人魚」の肉を食べ比丘尼となって八百年生きた「八百比丘尼伝説」については、白比丘尼が上洛し人々の関心を集めたのが宝徳元年（1449年）であることから、諸文献にその影響が認められるようになるのは、主として江戸時代以降のことである。例えば、井原西鶴の浮世草子、曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』、貝原益軒の『西北紀行』、百井塘雨の『笈埃随筆』等がある。

井原西鶴（1642年-1693年）の『好色五人女』（1686年）の巻五の五「金銀も持あまつて迷惑」と『西鶴織留』（1694年）の巻五の一「只は見せぬ仏の箱」に、当時長寿の薬として重用された「人魚」の肉についての記述がある。

庭蔵みれば、元渡りの唐織山をなし、伽羅掛木のごとし。さんごじゆは壺匁五分から百三十目迄の無疵の玉、千二百三十五、柄鮫、青磁の道具かぎりもなく、飛鳥川の茶入、かやうの類ごろつきて、めげるをかまはず、人

魚の塩引、めのふの手桶、かたんの米かち杵、浦嶋が包丁箱、弁才天の前巾着、祿壽の剃刀、多門天の枕鍮、大黒殿の千石どをし、ゑびす殿の小遣帳、覚へがたし。（『好色五人女』）<sup>19)</sup>

其証拠には、我等寺同行の人、十六・十四に成娘二人もたれしが、世盛のこしらへ、何にひとつふそくもなく、美をつくしたる衣装、敷銀千枚づつ付て、聳は願ひのままの所へ仕付られしに、姉むこ次第に家栄へければ、世につれて姿も若やぎ、三十にあまる年も、嫁入時のすがた今に残りて、人皆女仙と名付、「是はあやかり物」といへり。此女、不老丸も吞まず、人魚も喰ねど、鰯のはしりを十月比より喰、正月の事ども霜月中に仕まはせ、当年も又五拾貫目はのびたる白銀の花を見て、目出たき事ばかり耳に聞し、嬉しき事に目みて暮らせば、どこで年のより所なし。（『西鶴織留』）<sup>20)</sup>

これらの西鶴による町人生活の描写の中で特に注目したいのは、「人魚の塩引」と「人魚も喰ねど」である。「人魚」の肉を食べ長寿を得た「八百比丘尼伝説」の影響が商人作家井原西鶴にも顕著に認められるのである。

中国文学の影響が濃厚な曲亭馬琴（1767年-1848年）の黄表紙『南総里見八犬伝』（1814年-1842年）の「第九輯」にも「人魚」の膏油とともに「人魚」の肉についての効能が記されている。

我家五世の祖なりける、麻呂太郎平信之より相伝へし、人魚の膏油今なお有り。伝へ云この膏油は、昔一箇の樽に装られて、塩浜に漂寓りしを、信之不思議に拾得て、もて秘蔵せり。……凝りて蠟の像くなりけるを、そがまま蔵め置けるに、有一年一個の頭陀ありて、我家に宿せし日、其頭陀件の膏油、我家に在りと聞知りて、主人信之に誨るよう、もし人ありて、人魚の肉を啖ふときは、其壽三千年を有つべし。惜かな膏油なれば、齡を延す奇効なし。さばれば是を燈火になすときは、雨風に減ずして、日月と光を同くす。又人の身の

目鼻口耳臍肛門、すべて九孔に塗りて水に入れば、大寒の日といへども、なお温にて、凍ることなく、波を潜りて海をも涉さん。又刀剣に塗るときは、鉄を切り角をさくべし。試給へ、といひしとぞ。<sup>21)</sup>

「人魚」の効能を詳細に列挙した曲亭馬琴の記述の中で、「八百比丘尼伝説」との関係で特に注目したいのは、「人魚の肉を啖ふときは、其壽三千年を有つべし」の個所である。「人魚」の肉を食べた比丘尼の寿命についてこれまでに判明している最長は、岡山県に伝わる「千年比丘尼」である。江戸時代に遊女の数が非常に多いことからその数「三千」といわれ、また仏教界には「三千大千世界」という言葉もありその影響も考えられないことでもないが、『水滸伝』の影響を指摘されている<sup>22)</sup>『南総里見八犬伝』の場合、同じく中国の詩人李白(701年-762年)の秋浦歌にある「白髮三千丈」の詩句が原典ではと推測されるのである。

林羅山以外にも、「八百比丘尼伝説」誕生の経緯を記したものに貝原益軒(1630年-1714年)の『西北紀行』(1713年=生徳3年)がある。

八百比丘尼の事。世俗の語り伝へに云く。古へ此辺に六人の福德長者あり。時々参会して宝物を競べ争ふ。食膳も又珍奇を盡す。或時人魚を料理す。五人の者は人魚を知らず。怪しき物とて食はず。其中の一人。人魚の肉五六片これを懐にして家に帰り。妻子に見せて捨てんと思ひ隠し置けるを。一人の女子。人魚は薬なる由を聞て。窃かに取て食しける。是より長命にて。八百年生きて、此所に住せしと云り。<sup>23)</sup>

なお『大和本草』(1709年)を著すなど自然科学者の目をもつ益軒は、この伝説について「荒唐無稽」と断じている。

貝原益軒以上に詳細に「八百比丘尼伝説」誕生の経緯を記しているのは、百井塘雨の『笈埃隨筆』(1790年=寛政2年)の「巻の八」で、若狭と「八百比丘尼」との関係を『万葉集』にまで遡り言及している。

万葉集に坂上大嬢贈家持云々、人者雖云、若

狭道乃後瀬及山乃、後毛将会君。枕草紙に、山は三笠山、後瀬山、小倉山、是特其名を得て云々。此山の麓に八百比丘尼の洞有。空印寺といふ寺に又社有り。八百比丘尼の尊像は、常に戸帳をひらく。花の帽子を着し、手に玉と蓮華やうの物を持たる座像なり。又社家に重宝あり。比丘尼所持の鏡、正宗作の鉾太刀、駒角、天狗爪あり、比丘尼の父は秦道満といひし人のよし、縁起に見えたり。初は千代姫と云し。今は八百姫明神と崇む也。越後柏崎町の十字街に大石仏有り。半ば土に埋る。大同二年八百比丘尼建之と彫刻して今に文字鮮明なり。隠岐のすさびに云、岩井津といふ所に、七抱の大杉あり。古へ若狭国より人魚を食したるといふ尼来りて、植て八百歳を経て、又来りて見んといふて去と云々。故に八百比丘尼の杉といふ。<sup>24)</sup>

まず引用にある比丘尼の父「秦道満」についてであるが、福井県小浜市に伝わる伝説では漁師、一方福島県塩川町の伝説に登場する「千代姫」の父は秦勝道、道満との間には親子関係はなく別人、百井塘雨は何を根拠にこのような報告をしたのか、単に「古老」の話を伝えただけなのか。さて百井塘雨の報告で特に注目したい個所は、柳田国男が「山島民譚集二」の中で指摘したことであるが、「越後柏崎町の十字街に大石仏有り。半ば土に埋る。大同二年八百比丘尼建之と彫刻して今に文字鮮明なり。」である。この報告に従えば、大同二年(西暦807年)、つまり平安時代前期にはもう「八百比丘尼」は生存していたことになるのである。

## VI. おわりに

本論においては、日本に伝わる「人魚」伝説解明のため、「八百比丘尼伝説」を中心に、「八百比丘尼伝説」の伝播時期と伝播地域、八百比丘尼の寿命、そして「八百比丘尼伝説」が井原西鶴の浮世草子等後世に与えた影響について主として江戸時代を検討した。

「八百比丘尼伝説」の伝播時期については、藤

沢衛彦の作成した「人魚出現の記録」には「清寧天皇5年(480年)、八百比丘尼人魚を食う(伝説)」とあるが、根拠となる資料の出所が明示されていないため検証のしようがなく、また鎌倉時代中期に発刊された『古今著聞集』(1254年)には、浦人が人魚の肉を食べたことは記されているが、八百比丘尼の存在には全く言及されていない。「八百比丘尼伝説」の伝播時期として最も有力視できるのは、『臥雲日件録』、『唐橋綱光卿記』、『中原康富家記』の記述にある、白比丘尼が上洛し京の人々の注目を集めた宝徳元年(1449年)以降の時期である。なおこの時の白比丘尼の年齢は二百余歳、白髪であったと報告されている。

「八百比丘尼伝説」の伝播地域については、詳細な調査を行った高橋晴美によれば、北陸・東海地方を中心に「28都県89区市町村121カ所」とあるが、この調査で気になるのは、文学作品等多くの文献において人魚出現の場所として記述されている北海道や青森県等日本海側の東北北部の県、および人魚のモデルとされるジュゴンが生息する沖縄県が28都県に含まれていないことである。人魚は出現したが、それを食べた八百比丘尼は、存在しなかったということであろうか。

八百比丘尼の寿命については、八百歳がほとんどであるが、中には千年、四百年、三百年、驚いたことに『南総里見八犬伝』の場合のように三千年という例もあった。なぜ八百年なのか根拠となる文献はないが、善悪両方の意味を持つ八百という数字は数が多いことを意味していること他に日本人好みも末広がりという意味する「八」という数字を含んでいるため比丘尼の寿命として人々にこの数字を選択させたのではなかろうか。

「八百比丘尼伝説」の影響を受けたと思われる文学作品等については、「白比丘尼」が上洛し注目を集めた宝徳元年以降の時期、主として江戸時代以降の文献に影響が認められた。例えば井原西鶴の『好色五人女』と『西鶴織留』、曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』、貝原益軒の『西北紀行』、そして百井塘雨の『笈埃随筆』で、他にも少なからずあると思われる。江戸時代の人々が「人魚の塩引」

など人魚の肉を不老長寿の薬として重用していたことが、これらの文献からうかがわれるのである。

以上の分析から「八百比丘尼伝説」が日本における文学作品等の「人魚」像の形成に関係が深いことは明白であるが、それがどの程度まで関係があるのか、特に八百比丘尼が京に上洛した室町時代以前の「人魚」像、例えば『日本書紀』に登場する「人魚」らしき生き物との関係はどうか、藤沢衛彦が作成した人魚出現の記録にある「清寧天皇5年(480年)、八百比丘尼人魚を食う」の根拠となる文献が確認されていないだけに結論をだすことは困難である。

(2011年4月19日受理)

#### 注

- 1) 藤沢衛彦『日本伝説研究二』(六分館, 昭和6年) p. 40.
- 2) 稲田浩二, 小澤俊夫編『日本昔話通観, 第11巻, 富山・石川・福井』(同朋社, 1981年) pp. 188-189.
- 3) 稲田浩二, 小澤俊夫編『日本昔話通観, 第19巻, 岡山』(同朋社, 1979年) p. 347.
- 4) 永積安明, 島田勇雄校注『日本古典文学大系84, 古今著聞集』(岩波書店, 昭和41年) pp. 533-534.
- 5) 『柳田国男全集, 第二巻』(筑摩書房, 1997年) pp. 579-580.
- 6) 林羅山『本朝神社考』(加藤咄堂編『国民思想叢書, 神道編』大東出版社, 昭和5年) pp. 539-540.
- 7) 日野巖『動物妖精譚』(葉賢堂, 大正15年) pp. 17-18.
- 8) 稲田浩二, 小澤俊夫編『日本昔話通観, 第13巻, 岐阜・静岡・愛知』(同朋社, 1980年) p. 192.
- 9) 石川純一郎編『会津の民話と伝説3, 猿丸太夫』(歴史春秋社, 昭和55年) pp. 168-170.
- 10) 稲田浩二, 小澤俊夫編『日本昔話通観, 第13巻岐阜・静岡・愛知』 p. 193.
- 11) 高橋晴美「八百比丘尼伝説研究」(『東洋大学短期大学論集日本文学篇, 第18号』昭和57年) pp. 93-96.
- 12) 稲田浩二, 小澤俊夫編『日本昔話通観, 第2巻, 青森』(同朋社, 1982年) p. 343.
- 13) 『南方熊楠全集, 第六巻, 新聞・未発表手稿』(平凡社, 昭和48年) p. 311.
- 14) 稲田浩二, 小澤俊夫編『日本昔話通観, 第19巻, 岡山』 pp. 346-347.
- 15) 稲田浩二, 小澤俊夫編『日本昔話通観, 第11巻, 富山・石川・福井』 p. 188.
- 16) 同前掲書。p. 189.



- 17) 『日本国語大辞典, 第 16 卷』(小学館, 昭和 50 年)p. 330.  
と『日本国語大辞典, 第 19 卷』(小学館, 昭和 51 年)  
pp. 420-421. 参照。
- 18) 『日本国語大辞典, 第 12 卷』(小学館, 昭和 49 年)p. 187.
- 19) 麻生磯次, 富士昭雄 『対訳西鶴全集三, 好色五人女』  
(明治書院, 昭和 58 年) p. 147.
- 20) 麻生磯次, 富士昭雄 『対訳西鶴全集十四, 西鶴織留』  
(明治書院, 昭和 59 年) pp. 152-153.
- 21) 小池藤五郎校訂 『南総里見八犬伝 (九)』(岩波書店,  
昭和 48 年) p. 124.
- 22) 大木康 「江戸と明の小説と画像をめぐって」(『東洋  
文化 85 号』東京大学東洋文化研究所, 2005 年 3 月)  
p. 84.
- 23) 貝原益軒 『西北紀行』(岸上質軒校訂 『日本紀行文集  
成, 第三卷』日本図書センター, 昭和 54 年) p. 360.
- 24) 百井塘雨 『笈埃随筆』(『日本随筆大成, 第二期 12』  
吉川弘文館, 昭和 49 年) p. 156.

## Die Sagen der „Meerfrau“ in Japan : Über „Die Sage von Yaobikuni (八百比丘尼伝説)“

**KUZUMI Kazuo**

Gibt es die Sagen der „Meerfrau“, die in Japan entstanden sind? Für die Aufklärung dieser Frage wurde „Yaobikuni densetsu (Die Sage über die Nonne, die die Meerfrau aß und danach bis achthundert Jahre alt überlebte.)“ in diesem Aufsatz hauptsächlich untersucht.

1. Die Zeit, wo sich diese Sage in Japan verbreitete: Es ist schwer, wegen der Sage die Zeit zu bestimmen. Nach dem Volkskundler Kunio Yanagita existierte die Nonne Yaobikuni in der Nara-Zeit. Aber nach dem Tagebuch „Gaun-nikki (臥雲日記)“ von Shuho Zuikei (瑞溪周鳳) ist die Zeit nach der Mitte der Muromachi-Zeit.
2. Die Gegend, wo sich diese Sage jetzt verbreitet: Nach Harumi Takahashi verbreitet sich diese Sage in 28 Präfektoren, besonders viel in dem Hokuriku-Gebiet. Aber in Hokkaido und Okinawa-Präfektur gibt es diese Sage nicht.
3. Diese Sage hatte hauptsächlich Einfluss auf die literarischen Werke in der Edo-Zeit, z.B. auf die von Saikaku Ihara (井原西鶴), Ekiken Kaibara (貝原益軒) und Tou Momoi (百井塘雨) usw.